

# かまくら 女性史の会 Newsletter

第 118 号

2024 年 7 月 27 日 発行

〒248-0012 鎌倉市御成町 18-10

NPOセンター鎌倉 気付

メールボックス 26

E-mail: syokmat@yahoo.co.jp

## 《本を読む母の思い出——長野県 PTA 母親文庫》

日本子どもの本研究会の月刊書評誌『子どもの本棚』が届くと、真っ先に「編集後記」を開く。5人の編集委員がそれぞれの身の回りの関心事を吐露した寸評が楽しく、考えさせられる。最新7月号では、(お)さんの文章に惹かれた。最近、学校図書館の本を借りるのにお金がかかるかと聞いてくる児童がいるとのことでびっくりした。その小学校のある地域は公共図書館とは縁遠く、書店もない。家庭の経済的理由もあるだろうが、小学生になるまで、本や図書館の存在に出会ったことがなかったのかも知れない。「子どもに本を手渡す以前に、「本とはなにか」子どもだけでなく大人にも伝えていく必要がありそうだ」、というものである。

今時そんなことがあるのかと驚きながらも、70年も昔の母と自分の情景が蘇った。

私の郷里は長野県の山間僻地、狭隘な谷間に六つの集落が点在する小さな村である。僅かな畑作と山仕事で生計を立てていた。母は暗くなるまで父と畑に出ていて、先に帰って夕飯の支度をしてくれればいいのにといつも思っていた。村には公共図書館も書店もなかった。まして家にある本といえは、家庭の医学書と雑誌『家の光』くらいで、NHK ラジオ「落合恵子の絵本の時間」の決まり文句、<絵本は生まれて初めて本というものに出合う・・・深くて豊かなメディアです>という経験がない。

小学校に上がると図書室はあったが、そもそも本を読む習慣がなかったので、殆ど出入りしなかった。本らしい本に触れたのは、月に1回、教室で母親にと手渡され、1ヵ月後に返す1冊であった。同じ集落の母親4人が組になり、1冊を1週間単位で回し読む。それが、「長野県 PTA 母親文庫」と知ったのはずっと後のことだ。本は県立長野図書館から郡・市の拠点公共図書館（配本所）に送られ、小学校に分配される。それを PTA の文庫担当者が児童に持ち帰らせるのである。読み手には、毎月どんな本が届くか分からない。小説や軽い教養書が多かったようである。

この仕組みは1950年に県立図書館が信大教育学部附属長野小 PTA の母親たちの要望で始めたものだが、忽ち知れ渡り、特に農村部の小学校 PTA から嘆願が殺到し、県内全域に波及した。個人の読書から読書会、読書雑誌発行、創作グループ設立へと発展した。神奈川県から全国に影響を及ぼしたようである。

本を読む母の姿を初めてみた。私がねだったのか、母の方からだったのか、よくあらすじを語ってくれた。今でいう母と子のストーリーテリングの真似事であろうか。大人の本だから恋愛小説もあったが母は頓着せず、子ども心に恥ずかしく聞いた覚えがある。これが私の読書体験の始まりである。

○ 鎌倉市図書館所蔵「長野県 PTA 母親文庫」資料

1) 叶沢清介『図書館、そして PTA 母親文庫』（日本図書館協会 1990） <中央>

2) 『図書館雑誌』第52巻第4号（1958.4）「特集 PTA 母親文庫はどこでもできる」 <腰越>

2024年7月20日

元明治大学図書館職員

飯澤文夫